



ぐんまのマスケット「ぐんまちゃん」



大学教育における人権教育の推進

～看護系大学の臨地実習における人権擁護の実際～

群馬県立県民健康科学大学教授 村上 みち子

群馬県立県民健康科学大学は、看護学部と診療放射線学部の2学部を有する医療職者養成教育機関である。

医療職は、生病老死に直面している人間に関わる職業であり、高い職業倫理に根ざし自らの行動を律して役割を果たす医療職者の育成が求められている。本学は、カリキュラムの中に、『生命倫理学』、『看護倫理学』、『人権擁護論』などといった科目を配し、倫理教育に力を入れている。また、大学全体として関係する人々の人権を尊重した態度をとることは当然のことである。

以下、看護学実習を例に、人権擁護の実際を紹介する。

看護学実習は、看護学生にとって必修の授業であり、また、授業展開にはクライアントの協力が必要不可欠である。

教員は、対象となるクライアントに対し、看護職者育成に向けた看護学実習の重要性を話すとともに、

①学生の実習に協力するか否かはクライアント自

身の自由意思に基づくこと、

②一旦協力することに同意した後でも、協力を断ることができること、

③断ったとしても、看護および診療上不利益な扱いを受けないこと、などを説明し、同意書を交わす。また、クライアントの個人情報やプライバシー情報を外部に漏らすことのないよう指導する。さらに、学生は学習途上にあり技術が未熟であることから、教員は、クライアントに提供する看護技術の質を保証するために、担当看護師をはじめとする周囲の人々と連携して緻密な教授活動を展開する。学生の学習する権利を保証することと、クライアントの安全を保証することの間で、どちらも満たせるよう日夜努力を続けている。



学生との語り

・ テーマ「教育機関における協働・連携と人権」 ・

《掲載内容》

◆地域の特性を生かした

学校での取り組み

- 群馬県立新田暁高等学校
- 藤岡市立藤岡東中学校
- 前橋市立筑井小学校
- 六合村立六合中学校
- 高崎市立国府小学校

◆紹介します

「市民公益活動団体」

- 高崎カンウセリング協会

いままでのような家庭・学校・地域がそれぞれに果たしてきた役割を担っていくことは難しくなっており、これからは異なったものの見方や役割意識について見直し、「地域と家庭」「学校と地域」といったかかわりの中で、地域社会全体を「一つの家族」として、役割分担や互いに補完しあう対等な協働関係を築いていくことが求められています。

地域社会は、「住み、働き、学ぶ」などの「場」であり、かかわりをもつ人同士が、人として尊重され、互いに認め合いながら「生活」をしていく「場」であります。

そこでは、より心豊かに暮らせることができるように県民・行政・機関・団体等の協働・連携した取り組みがさらに必要な時代となってきています。

今号は、「きずな」として初刊です。学校を中心とし地域社会とのかかわりが「人権」の視点からどうなっているか、考えてみたいと思います。



地域特別支援教育コーディネーターと 連携して生徒たちの支援を考える

群馬県立新田暁高等学校

「心豊かな人間の育成」は易しくないですが、「心豊かな人間(生徒)の発見」ならば少し気をつけて、複数の眼で生徒を見ていけば難しくないことのように思われます。

トラブルを抱えてしまった生徒を支援することは大切です。この生徒についても教師の複眼で見ていけば、しばしば「心豊かな」側面を発見できるものです。また、私たちはその生徒を支えている生徒を発見できるときに支援の手がかりを得ることができ、教師の指導を通して、支えている生徒がその支援の意味を知るとき、それを「心豊かな生徒の発見」ということができるのではないのでしょうか。

平成20年度、本校では特別支援教育の校内事例検討会を1年間に4回開催しました。講師として毎回太田高等養護学校の地域支援コーディネーター2名に参加していただきました。このコーディネーターの方々にはまず該当生徒が参加する授業を見てもらいます。そのクラスだけ見るのではなく、全校の授業を見てもらうなかで特にそのクラスを見てもらうのです。それが終わってクラス担任と特別支援教育担当とコーディネーターとで生徒の状況を交流します。そして一週間後の放課後に教科担当を交えて「事例検討会」を行います。

ひとりの生徒についてクラス担任と授業を担当している教師たちが生徒の状況を報告します。そして地域支援コーディネーターが別の視点からの生徒理解を示し、支援の可能性を探ります。

この研修会の実施によって「立ち止まる」「生徒の事実を共有する」ということの大切さを改めて知りました。また、特別支援教育というのは私たちがやったことのない教育なのではなく「すでに必要に迫られてやっている個別の支援」だということを知ることができました。

同じ地域の特別支援学校の先生方とのこのような協同は少し緊張感のある大変刺激的なものでした。最初にも書いたように生徒たちを複眼で見るといことによって個々の生徒はもちろん教師たちの豊かさをも発見でき共有できるのではないのでしょうか。

地域の特性を生かした学校での取り組み



住み慣れた地域で生活
できることは私たちの願い



国立療養所栗生楽泉園入所者の方々との交流

六合村立六合中学校

本校では、平成19年、20年と文部科学省より人権教育研究指定校の指定を受けたことをきっかけに、草津町の栗生楽泉園との交流による「ハンセン病患者の人たちについての人権課題」の学習をはじめました。その内容は、「ハンセン病に対する正しい知識を身につけること」「栗生楽泉園の入所者や職員の方々との交流を通し、ハンセン病患者の方々への境遇や生活について共感的に理解すること」です。

これまで、施設見学やゲートボール、自宅訪問、年忘れ会参加等の訪問や栗生楽泉園の自治会長さん、職員の方による講演会、校内文化祭への招待等を行ってきました。これらの活動の中で、生徒たちは「知ることの大切さ」を学び、無知や誤解による偏見や差別によって人が深く傷つくことを共感的に理解することができました。また、長年、病気や差別と闘ってきた入所者の方々の優しさや温かさに触れ、生徒は大きな感動と生きることへの勇気を与えられました。

栗生楽泉園との交流は、まだ2年目の取り組みですが、交流をさせていただいた入所者の方と生徒の間で、学校の計画以外の手紙のやりとりも数例見られるようになりました。今後もこの有意義な交流活動を継続していきたいと考えています。



年忘れ会での全校合唱



地域に広げよう人権のこころ

藤岡市立東中学校

本校では、私たち誰もが持っている「優しさ」や「思いやり」の心をみんなが自覚して、それを地域に広げようという活動を行っています。「人権の花いっぱい運動」は、マリーゴールドを全校生徒の手で育て地域の方々に配ることで、みんなで命を大切にすることをもち、東中生が人権について考えていることを地域の方々にも知ってもらおうという活動です。全校生徒が自分の手で種を蒔き、各学級のベランダで育てます。ひとつの株にいくつか花を付けるようになったら、自分の家と自分の家の両隣の家に1ポットずつ、この活動の趣旨の説明と感想を書いたチラシを添えて、生徒全員で配付します。花を届けたとき、ご近所の方から「ありがとう、大事に育てるよ」と、喜んで受け取ってもらうことができました。

さらに、「あいさつは、お互いを認め合う人間関係づくりの第一歩」という考えから、東中校区(東中・藤岡第一小・美九里東小・美九里西小)4校の児童・生徒とその保護者、地域の団体(区長会、青少年推、子育て連、更生保護女性会)の方々が、学期に1回1週間ずつ

年3回、一緒に「地域でふれあうあいさつ運動」を行っています。その際、東中からは、「あいさつボランティア」に応募した生徒たちが自分の母校である三つの小学校に出かけて、小学生や地域の方と一緒にあいさつを行っています。



藤岡第一小学校でのあいさつ運動



地域連携で広がる人々とのつながり

前橋市立筑井小学校

地域の教育力を活かした多様な活動のなかで、子どもたちは多くの人々と出会い、感動を味わいながら、優しい心や地域での共生についての感覚を身につけています。

安全な下校のため、自治会や老人会の方々がおに立て子どもたちを迎えてくれるバス停型ウォーキングバスでは、あいさつに加え、「髪を切ったの?」「○○ちゃんはまだ?」など、心と心がつながる会話が交わされます。「地域で子どもを育てる意識で協力しています。」と自治会長さんから力強い言葉をいただきました。



ウォーキングバス

子どもたちは感謝の気持ちを伝えるために、敬老集会やありがとう集会を開いたり、学校を花でいっぱいにして地域の方々にも楽しんでもらおうと、筑井フラワーパークづくりに取り組んだりしています。



敬老集会

また、地域には3つの老人福祉施設があり、交流を行っています。子どもたちは、高齢者疑似体

験をして高齢者の特性を理解し、楽しんでもらえるゲームを手作りし訪問しますが、お年寄りのすご



老人福祉施設訪問

さに触れ、沢山励まされ、元気をもらい、高齢者への理解を深めて帰ってきます。七夕集会では、施設の方がリハビリを兼ねて作った飾りを届けてくださり、お礼に集会に招待するなど、つながりが強くなっています。他に、放課後寺子屋教室や読み聞かせのボランティア、学習での地域講師、地域諸施設の方々、前橋国際大学との連携事業で活動している50名ほどの大学生や留学生など、実に多くの人々との出会いがあります。

活動を通して、その人々の生き方に触れ、人々の思いへの理解を深めることで、優しい心や期待に応え頑張ろうとする気持ちが育っています。



留学生によるアジアの国々の話



食材の栽培から食卓に 上がるまでの人と人とのつながり

高崎市立国府小学校

本校の特色ある3年の総合的な学習「国府自慢・国府白菜を育てよう」の単元は、「白菜栽培の土作り、畑作り、種まき、マルチはり、苗植え、駆除、収穫、調理」の学習過程を通し、国府の誇りを持ち共によりよく生きる方途を探るものである。この活動は、「地域の関係者の惜しみない協力」があつてこそ実現し、このつながりに対し、児童の喜び、成果、感謝を下記のように発信している。

- (1) 白菜育成過程の区切りごとに、協力関係者に感謝の礼状を届ける。
- (2) 児童全校集会「感謝集会」に関係者を招待し、感謝の気持ち、喜びを伝える。
- (3) 総合の本単元の活動の過程や様子を多様な機会を活用して発信する。
 - ① 校内の掲示板に大きく取り上げ、来校する方々に紹介した。
 - ② 県の奨励事業「ほくたちわたしたちの学校自慢」に応募し、活動を発表した。

児童の感想から、国府の人・自然・土地などのすばらしさ、国府地区の一員として自慢しなくなる思いを強く抱き、国府のことにさらに関心を深めたことがわかる。今後も協力への感謝を丁寧に発信し、地域とともに歩む喜びを共有していきたい。



地域の方々からのご指導



紹介します!!・・・市民公益活動団体

かかわりの中で、十分に生きる社会をめざして

高崎カウンセリング協会

私たちの団体は、カウンセラー養成の場ではありません。

それぞれが家庭や職場・地域社会等において豊かな人間関係づくりと自らの向上を図ることを目的として昭和60年に設立されました。現在の会員数は200名ほどで、中央公民館を会場に講演会やワークショップを開催しています。

また、毎年“自分を知る”としたテーマで、地域の方を対象に「入門・初級講座」を開講しています。講座では、カウンセリングの理論とともに、改めて自分の“話す”“聴く”“表現する”を意識して、他との価値観の違いを認め、思いやる体験を行っています。

援助的な人間関係の体験を通して、他も一緒に伸びていこうという姿勢を持ち、こころ豊かになって地域で活躍できるような学習をしています。

講座の修了後は、学んだことを活かし、さまざまな場でボランティアとして活躍しています。その1つに、中央公民館と共催で行っている「なやみごと相談」があり、その際の相談員として携わっています。

相談の内容は多岐にわたりますが、相談に見えた方の立場になって話を聴き、内容によっては、市内外の専門相談機関を紹介したり、その人が「人に語ることによって」心の悩みを整理し、自分にあった解決方法を一緒に考えたりしています。

話を聴いてもらえたという安心感を持ってもらえるような寄り添う活動もしています。

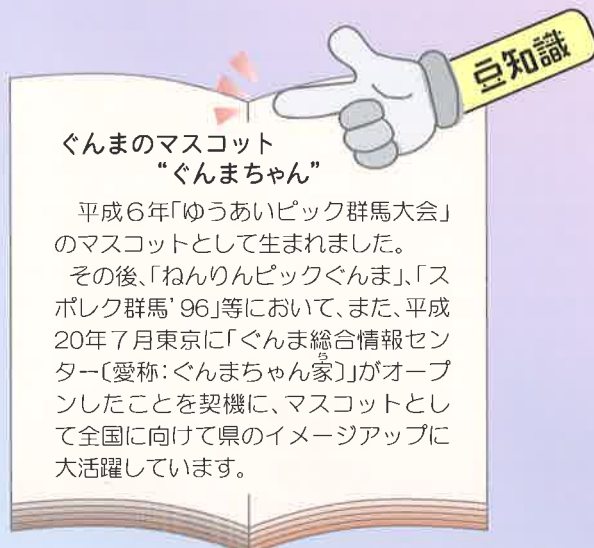
地域でのなやみごと相談活動を通じて、自他共によりよい「居場所」づくり、安心で安全な社会の構築に貢献できればと思って日夜研鑽を重ねている団体です。
(事務局長；倉地 政美)



相談会場となっている中央公民館入口の立て看板

<平成21年度六合村「人権標語」最優秀作品より>

「わたしから そっとさしだす やさしい手」 六合小学校 第1学年 黒岩 秋歌
「友達の 笑顔といいとこ さがそうよ」 六合中学校 第1学年 山本 光成



ぐんまのマスコット “ぐんまちゃん”

平成6年「ゆうあいピック群馬大会」のマスコットとして生まれました。

その後、「ねんりんピックぐんま」、「スポレク群馬'96」等において、また、平成20年7月東京に「ぐんま総合情報センター〔愛称：ぐんまちゃん家〕」がオープンしたことを契機に、マスコットとして全国に向けて県のイメージアップに大活躍しています。

編集後記

この情報誌を発行し3年が経過します。まだまだ「人権って堅苦しい」、そうしたイメージをお持ちではないでしょうか。でも、人権問題は、日常生活の「人とのかかわり」の中に起きています。そこで、周りにある話題をみつけること、また、紙面の構成や色彩・文章表現などでいかに親しみを持って、理解していただけるかに心がけ、タイトルについても、人とのかかわりで大切にしなければならない「絆づくり」をめざす意味を込めて、「きずな」としました。

おわりに、発行に際しましてご協力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。(こ)